歴史地理学　43－3（204）36～52　2001.6

近世末期奥三河・山崎家「日知録」にみる行動領域

村　田　祐　介

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．史料の概要と研究の方法
Ⅲ．対象地域と山崎家の概要
　(1)　対象地域の概要
　(2)　山崎家の概要
Ⅳ．家族構成員別にみた行動領域
　(1)　世帯主：譲平の行動
　(2)　妻，母：うめ，いくの行動
　(3)　息子：正作の行動
　(4)　使用人：仲三郎，嶋助の行動
Ⅴ．山崎家にかかわる人物の行動領域
　(1)　山崎家への出入り者
　(2)　行動目的別分類
Ⅵ．おわりに

Ⅰ．はじめに

近世，近代における日本の村落について，地理学の分野では農林業，新田開発，商品流通などの社会経済的な研究が主流を占め，村落形成の主体となる民衆の生活行動に関しては必ずしも多く語られてこなかった。

ところが近年，地方史料を発掘し，それを綿密に分析したいくつかの優れた研究が発表されはじめた。例えば中西僚太郎は，茨城県西部の一農家・中島家の明治末期から昭和初期にかけての「播種一覧表」と「農業日記」をもとに，農業経営と労働力構成の変遷を明らかにし[1]，別稿でさらに，労働の季節的リズムと年中行事に焦点を当て，そこから村落生活一般の姿を描き出した[2]。霧生学は武蔵国多摩郡柴崎村における「公私日記」を用いて，行動地理学と歴史地理学とを織り交ぜた方法で生活交渉空間の類型化を試みた[3]。溝口常俊は山梨県中巨摩郡白根町西野村に残る明治期の『源吉日記』をデータベース化し，農業，商業活動，消費生活などを総合的に分析し，農外余業の多様性および地域間交流の活発さを示した[4]。

日記を用いた研究は地理学以外にも様々な学問分野で行われており，例えば，水本邦彦は河内国河内郡日下村の庄屋日記を25年にわたり追跡し，庄屋職にまつわる村外，村内両方の交友関係を中心として展開される日常生活を明らかにした[5]。田中雅彦は，長野県喬木村における明治期の庄屋職を事例として挙げ，農業経営の生産と消費という観点に重点をおいて，社会背景にともなう経済活動の変遷を明らかにしている[6]。成松佐恵子は，美濃国安八郡西条村（現，岐阜県安八郡輪之内町）の庄屋日記を素材として，村の経済，庄屋家族の暮らしぶり，女性の活動など日常的行動にまつわる社会生活全般に光を当てた[7]。

そのほか，近世における生活行動に関しては，通婚圏あるいは奉公人に関する研究が挙げられる。例えば川口洋は，近畿地方における遠方婚の実態[8]を，溝口は甲州において通婚圏[9]，および奉公人の移動圏[10]を明らかにした。しかしながら，そこでは宗門改帳という史料の性格上，年間を通じて一家族に焦点を当て，その家族構成員のそれぞれの行動を論議するまでには至っていない。

本研究はこうした一連の研究に類するものであるが，特に日記史料をもとに近世末期における山間住民の生活行動の詳細を明らかにする点に特色がある。

日記史料を用いる問題点は，福田アジオによって「日記をつける人物は文字を信頼するという点で特別な人であることを忘れてはならない」と指摘されており[11]，中西は「所在がつかみにくく，いわば偶然の発見に頼るほか無く，一農家の事例，一個人の視点をどこまで一般化できるのかという問題を持つ」とし[12]，成松は「登場人物の年齢や続柄について，全くといっていいほど，読むものに見えないのがふつうである」という[13]。しかし，このような問題点を補って余りある利点が日記にはある。福田，中西のいう日記の問題点も，書き手がどんな立場の人物であったとしても，日記に多数登場する人物の行動については，当時の生活を示す上ではかなり有効だといえるし，成松の指摘する年齢，続柄の問題も同時期の家族，人口史料と照合できれば解消できよう。日常的な記録の利用という史料の拡張と必要性を説く柳田国男の言[14]を待つまでもなく，本研究において日記史料を母体として村落生活研究を進めていくことは有意義であると考える。

Ⅱ．史料の概要と研究の方法

本研究で用いる『日知録（にっちろく）』[15]は，近世末期から明治初期にかけて下津具村（現，愛知県津具村）の医師であり，同時に上層農民であった山崎譲平が年中欠かすことなく書き続けた日記である。

『日知録』の内容は農事日誌的な意味合いが濃く，日々の農業に関する記載が主たるものであるが，それだけにとどまらず，来訪者，医療，奉公人の動静，山論，年中行事，信仰など多岐にわたっている。さらに，山崎家の出来事のみならず，山崎家にかかわる周辺事実まで丹念に記録されているため，山間部における民衆の暮らしや世相を知る上でその史料としての有用性は非常に高い。

『日知録』の書き方は，説明的および感情的ではなく，いたって個別的で箇条的である。例を挙げると，安政４年３月11日に実子が死亡し，慶應３年11月26日には実母が死亡しているが，前者については「十一日晴天昨夜ヨリ周治追々重病ニて今朝五ツ時分ニ死去小児之義ニ附今日葬式致ス」，後者については「二十六日日和母死去四ツ時也夫ヨリ親類知らせ大工を頼み拵へ致ス」とあるだけで，私情を挟むことなく，淡々と事実とその後の対応を書き連ねている。稲田清一は「日記というものは，他人に読ませることを想定して書かれていないため，個々の事柄の内容にまで踏み込んだ記述はなされないのが普通である」と触れており[16]，本日記も稲田の指摘する通りである。

『日知録』は，従来幾多の視点から研究が進められてきている。その嚆矢となったのが安藤慶一郎によるもので，山崎家の歴史から農作業の変遷，年中行事にいたるまで『日知録』の記載事項について述べている[17]。田崎哲朗は農山村部での牛痘法の広がりの一例として『日知録』を取り上げ，その経緯について丹念に追究している[18]。村松信一郎は『日知録』の安政２年分をその著書の中で現代語訳するとともに，山崎家の家族構成に触れ，独特の用語について解説を加えている[19]。さらに，田崎・湯浅は『日知録』の安政３，４年分を取り上げ，医療，家族構成，農作業，年中行事，交際圏などを概観している[20]。これらの歴史的事実を細かに追った研究により，『日知録』が記された時代の社会的背景をおおよそながらとらえることが可能となった。

しかしながら，これらの研究では『日知録』の史料性が追究される一方で，本来主体たるべき人間の行動には重点がおかれておらず，『日知録』中に出現する地名に関してもあまり関心が払われていない。それゆえに，空間的

分析がきわめて弱くなっている。本研究で人間行動に焦点を当てて，時空間両側面に目を向け研究を進めていくことは，一農村（あるいは一家族）を多角的に考察していくことになり，地理学にとどまることなく，隣接諸分野に対しても少なからず貢献するであろう。

安藤によると，日記は嘉永7年（1854）1冊，安政2-5年（1855-58）4冊，元治元年（1864）1冊，慶應2，3年（1866，67）2冊が残存しているはずであるが[21]，その後史料が散逸し，現在，山崎家には種痘に用いた原版の心得が書かれている版木と安政3，4年の2ヵ年分の日記しか残っていない。村松，田崎・湯浅の一連の研究と，津具村教育委員会や津具村村誌編さん室などに複写され保存されているものを調査した結果，1年間の記録がくまなく網羅されているのは安政2，3，4年と慶應3年の日記であった。そこで，本研究では1年間あますところなく追跡することの可能な，安政2年（354日分），安政3年（355日分），安政4年（384日分）および慶應3年（354日分）の日記を利用していく。

本研究の日記分析を補助的に支える史料として「宗門改帳」，「村送り一札之事」，「宗門送り一札之事」を活用した。津具村には，安政2年の『日知録』が記される5年前に作成された『嘉永三年亥年禅宗宗門人別五人組人別改帳』[22]が残っており，これで『日知録』登場人物の年齢や続柄が比定できる。また，本宗門改帳は，現住地主義によって書かれており，山崎家で雇用していた使用人の所在を確かめることが可能である。

「村送り一札之事」，「宗門送り一札之事」のうち，前者は近世社会において，町民や農民などの被支配者が，婚姻・養子縁組・奉公などによって他村へ行く場合における送籍の書状のことを言い，後者は同様の事柄を，檀那寺から先方の寺へ宛てる書状のことをいう[23]。つまり，村を移動し籍を移す際に義務付けられた書状である。ここで用いるのは津具村村誌編さん室で保管されている安政2年から慶應3年にかけての「村送り一札之事」と「宗門送り一札之事」[24]である。これらの史料を用いることによって，人々の移動を追跡することが可能である。

本論でいう「行動領域」とは，字義の通り「ある1人の人間が行動する領域」を指し，荒井らのいう「生活活動空間」とほぼ同意であると考える[25]。

本研究で特に注目していく論点の第1は，日記作成者の家族構成員を取り上げ各自の行動領域の特性を明らかにすること。第2に，山崎家を中心とする人の動きの実態をとらえること。第3に，日記作成者が医者であるという史料の特性を踏まえ，山間部における医療圏域を時空間両方の視点から明らかにすることにある。なお，日記文の解読にあたっては，前出の村松，田崎・湯浅の研究や『津具村誌』を参照しつつ，できる限り原史料を入念に吟味した。

Ⅲ．対象地域と山崎家の概要

(1) 対象地域の概要

山崎家が居を構えた津具村は，愛知県の北東部，長野県境近くに在り，四方を1,000m前後の山々に囲まれた平均高度約680mの盆地に位置している（図1）。

藩制時代は御林の関係上，天領である上津具村と挙母藩の支配下にある下津具村とに分かれていた。上津具村には中馬街道の1つである伊那街道が通じ，三州吉田（現，愛知県豊橋市）から信州飯田にかけての物資の中継地点として大いに賑わいをみせた。上津具村を通過する馬は最盛期（化政期～明治中期）には年間1万頭にも達し，津具村の馬士も上津具24人，下津具20人を数えた[26]。

また，津具村は三河山間部としては名倉（現，愛知県設楽町納倉）に次ぐ穀倉地帯で，稲作も盛んであったが，主食は米ではなく稗であった。米・稗以外では大麦，小麦，蕎麦

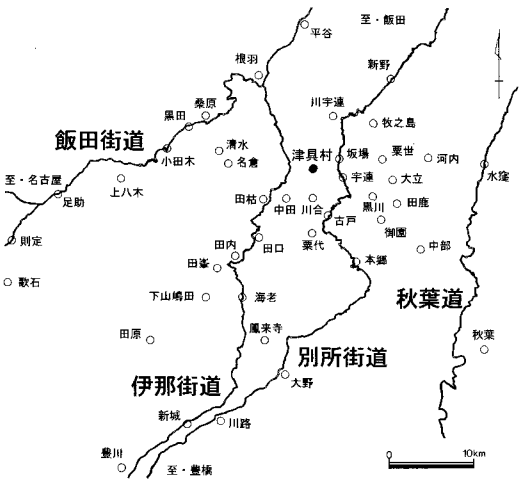

図1　対象地域

などの穀類が栽培されており，こうした前近代の津具村の景観とその変遷が，宮本常一・宮田登編により津具村柿沢宇連の村松学平氏の記した『万作物覚帳』と聞き取り調査をもとに，明らかにされた[27]。また有薗正一郎は，地籍図をもとに明治期津具盆地の里山の景観と利用の実態を明らかにしており，用材，干草などの目的別の土地が民家近くにあることを示している[28]。これらの研究は『日知録』からは復原できない津具村の里山と耕地の景観を示してくれる。

(2)　山崎家の概要

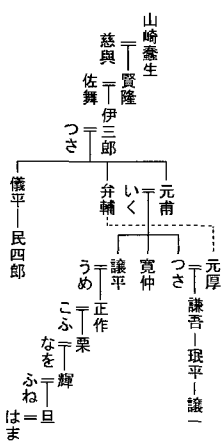

図2　山崎家系図

下津具村中ノ沢にある山崎家に伝わる家系図（図2）によると，山崎家は甲斐武田氏の流れをくむという。詳細な年代は定かではないが医業を開始したのは蠢生であるとされている。その後，賢隆，伊三郎，玄節，元甫，寛仲と続き譲平は7代目にあたる。寛仲，譲平の父親である5代目の元甫は寛仲，譲平の2人が1人前になるまでに没したが家業としての医業は寛仲，譲平の実姉であるつさが，同業者の三輪元厚（遠江国周智郡奥領家村，現，静岡県水窪町）を婿として迎えることによって存続した。しばらくの間，寛仲は美濃国大垣に，譲平は備前国金川で難波抱節に師事し医業を学んだ。譲平が種痘技術を学んだのもこの時だとされている。種痘の種苗は譲平が勉学を終え帰郷する際，備前から持ち帰った牛によるものであるらしい[29]。元厚は寛仲が1人前になるまで家を守り，その後，寛仲に家を譲り，自身は上津具に移住し断絶していた山崎元甫の弟弁輔の医家を再興した[30]。しかしながら，後を継いだ寛仲も病弱であったため，時を待たずして寛仲は弟である譲平に家督を譲ったのである。なお，現在は11代目にあたる旦氏が家業を継いでいる。

さて，本研究でたびたび用いる「山崎家」とは，先に挙げた宗門改帳の中で1つの家(世帯)を構成する単位を指すこととする。ただし，その中で家長と記載されている寛仲に関しては，日記の対象年となる安政2年には隠居していると見なすことができるので[31]，寛仲夫妻を除く構成員，すなわち，譲平（世帯主），うめ(妻)，いく(母)，正作(息子)[32]，仲三郎（使用人），嶋助（使用人）を山崎家の構成員とした。そのほか，単年度限り，あるいは季節的労働者としての使用人であろうと推測される人物に関しては，本研究では山崎家の構成員とはしない。

山崎家は，当時としては画期的だった種痘技術を含めた医業を行っていた。世帯主の譲平は，明治以降になると数々の神官職をも歴任している。譲平の種痘技術はきわめて斬新なものであり，江戸で正式に種痘所が設置されるよりも早くに種痘が行われたという記録が残っている[33]。これらに加えて，多数の季節労働者を雇って広大な田畑山林経営を行っていた。明治初期の所有状況は，田（2町6

反6畝22歩)，畑（1町3反7畝19歩)，山林(6町1反6畝6歩)，馬(3匹)，宅地(6畝4歩)，建物(113坪)，土蔵(15坪)であった[34]。

Ⅳ．家族構成員別にみた行動領域

はじめに，行動領域の分析にあたっては次のような分析方法を用いた。

1行動は1人の人間の「サイクル数」に基づいたものであり，「トリップ数」によるものではないものとした[35]。そして，複数人が行動をともにした場合はその人数分を加算する。同時に，人数が特定できない場合は記録に加算しなかった。行動の方向性については山崎家を起終点としてとらえ，「往復」の「往」の流れをくみ取った。例えば，「何某，aより帰宅」しか書かれていない場合は，「a」まで行ったものと見なし，「往」の方向性をとらえた。

また，原則として目的地を抽出する。地名が重複し，選定に困難を極める場合には最近隣の地名を抽出した。

(1) 世帯主：譲平の行動

譲平は宗門改帳によると，安政2年(1855)時点で39歳である。譲平の日記中における全記載数は計412回。その中で，譲平が訪れ，目的地が明瞭なものは251回であった。そのうち，安政年間（1855-57年）が172回で，慶應3年(1867)のものが79回となっている。これらをまとめて，譲平の行動領域を表したものが図3である。そのうち，村内の行動回数を表し同時に山崎家の中での割合を示したものが図4である。譲平の行動領域は村内村外ともくまなく分布している。

譲平の行動領域は，図3に示される通り，すでに安政年間の時点で東部は現在の豊根村全域をほぼカバーしており，10年後の慶應3年とでもあまり変化していない。対して，南部では，時代を追うごとにその行動領域が海老，新城，豊川へ伊那街道沿いに拡大し，安政年間は津具－田口－海老を線的に結ぶような行動領域であったものが，慶應3年に入ると，より面的な空間的広がりを持つようになった。また図4に示された通り，村内に関しても全域をカバーしている。このうち上津具，中林へは親戚筋の屋敷への所用として通うことが多かった。

譲平の行動領域は，家長，あるいは医者として山崎家の中でも村内・村外ともに，最大規模であった。

(2) 妻，母：うめ，いくの行動

宗門改帳によると，安政2年時点で譲平の妻であるうめの年齢は33歳，母であるいくは65歳である。うめといくの『日知録』における全記載数は安政年間，慶應3年を合わせてもそれぞれ40回，50回にとどまる。数字の上ではあまり多いとはいえず，目的地が判明す

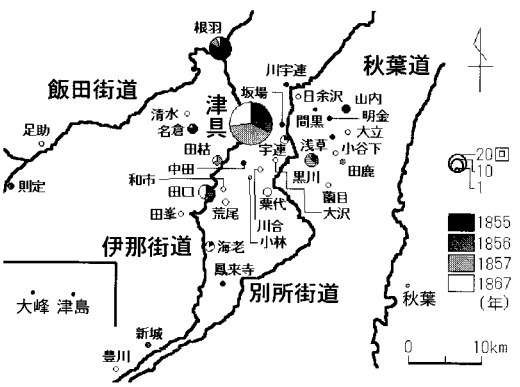

図3　譲平の行動領域

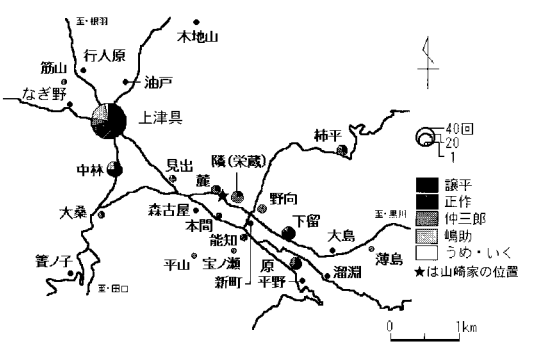

図4　山崎家・村内

るのはそれぞれわずかに9回，23回にしかならない。その数少ない記載をまとめたのが表1である。

女性の行動は目的地が記載されないことから，村内での行動が多いことが理解できる。その中で，うめの根羽への行動8回というのが目を引く。これは，根羽にはうめの実家があるからである。同様に，いくの行動が2回確認できる田口にはいくの実家がある。

また，いくは非常に信心深く，氏神，薬師堂をはじめとしてさまざまな信仰にかかわる地点への行動が多くみられた。一方で，うめはまだ若いため，そのような行動の記載はなかった。

村内での彼女たちの行動をみると，図4で示した限り，うめ，いくの行動数は多くみることはできない。これは地点が確定できないことと，自宅周辺での労働あるいは自宅内労働がきわめて多いことによる。

妻うめと母いくの行動領域は，ほかの構成員と比べてもきわめて狭い。女性が村外に出るということはきわめて稀であり，出たとしても姻戚関係のある村落間で終結する傾向が強かった。

(3) 息子：正作の行動

譲平の嫡子である正作は，宗門改帳によると安政2年時点での年齢は若干7歳である。譲平は正作以外にも少なくとも2人の子どもがいたが[36]，そのいずれも亡くしている。正作の全記載数は114回，その中で目的地が示されているものは全部で66回ある。その内訳は安政年間3年分での行動が延べ38回であるのに対して，慶應3年のそれは31回となっており，年間あたりの正作の行動が10年間の間に大幅に増加している。

図5から，正作の村外への行動領域は，安政年間には根羽，田口，中田，黒川など姻戚関係のある諸村落，あるいは近隣村落に限られており，さらに単独で行動するということはほとんどなかった。これに対し，慶應3年

表1 妻うめ，母いく行動記録

うめの目的地	1855年	1856年	1857年	1867年	計
根　羽	6	1	1	0	8
上津具	0	0	1	0	1
いくの目的地	1855年	1856年	1857年	1867年	計
上津具	1	3	1	0	5
寺	2	1	0	0	3
氏神様	1	2	0	0	3
田　口	1	1	0	0	2
薬師堂	1	1	0	0	2
川　合	1	0	0	0	1
野　向	0	0	1	0	1
念仏堂	1	0	0	0	1
みと山様	1	0	0	0	1
道元様	1	0	0	0	1
七　宮	0	1	0	0	1
見　出	0	1	0	0	1
下　留	1	0	0	0	1

・単位は回数で表示した　　(『日知録』より作成)

になると医業活動も加わることで[37]，秋葉，平谷，岩村など距離のある場所へもその行動領域が拡大していくとともに，近隣村落の坂場，大沢，田枯などへも単独で出かけるように変化した。また，図4に示したように，村内での行動領域は村を網羅するとはいえず，親戚関係と近隣への行動に終始していた。

息子正作の村外への行動領域に関しては，正作の成長とともにその拡大と行動数の増加を把握できた。一方，村内については，行動領域が局所的に表れたことが目立った。

(4) 使用人：仲三郎，嶋助の行動

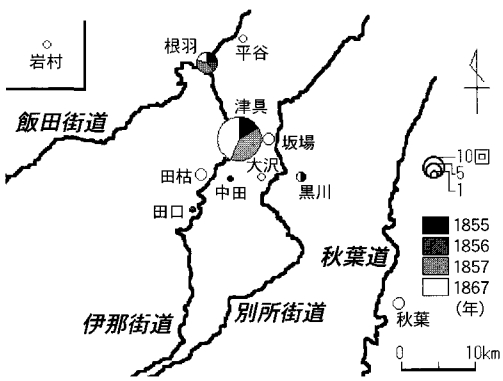

図5 正作の行動領域

仲三郎の行動記録で目的地が示されているものは全部で114回に達する。さらに，家周辺で行われる農作業など，さまざまな日常生活にわたる記載数は安政２年270回，安政３年303回，安政４年314回の計887回におよび，安政時代の山崎家を支える屋台骨であったといっても過言ではない。図４，図６をみると，仲三郎の行動領域は村内，村外にかかわらず広範囲にわたっている。村外についてみると，近隣の根羽，古戸から遠くの新城，豊川に至るまで幅広い。ただ，全体的に伊那街道沿いにその領域は広がっており，飯田街道方面にはあまりみられなかった。村内に関しては，近隣の集落から村境の集落まで行動領域は広がり，世帯主譲平に勝るとも劣らないほど，津具村内を歩き回っていた。

また，仲三郎が26歳になった慶應３年の日記にほとんど姿をみせないようになる。明治４年（1871）の日誌によると詳細は定かではないが，仲三郎自身が何やら一大決心を腹に決めたようである[38]。山崎家の使用人からの離脱である。

次に嶋助の『日知録』中における全記載数は計291回であり，その中で目的地が示されていたのは，安政２年11回，安政３年12回，安政４年16回で，慶應３年では20回であった。宗門改帳によれば嶋助は安政２年時点でわずか12歳であったから，慶應までの10年間に，すなわち，幼年から青年へ成長するにつれて，その行動が活発になっている。村外への行動領域を図７でみると，安政年間では中田，川合という津具村に隣接する２カ村に限定されていることに対し，慶應３年では，この両村に加えて，別所街道[39]沿いの坂場，粟代，さらには津島代参までしており，その行動領域の拡大を知ることができた。

使用人である仲三郎と嶋助は，目的地が明記された行動のうち，両人が併記されているものは『日知録』全体でもわずかに１回しかない。しかし，目的地が不記名ながら行動をともにしたのは，安政２年７回，安政３年36回，安政４年48回となっている。このことから嶋助の成長に応じて，仲三郎とともに行う「より大人たる仕事」[40]が嶋助に課せられていったことがわかる。

彼ら使用人の村外への行動領域は山崎家直系の正作と同じく，年齢に応じて拡大していった。しかし，正作と嶋助はほぼ同年代であり，同じ家の中で生活していながら，正作に比べ，使用人の嶋助は村内，あるいは中田，坂場，川合など山崎家の家事，労働に基づく行動領域をみせた。

最後に，現代暦に変換して[41]，月別に目的地が判明している行動を抽出し，その季節的な特性を追跡した。とくにここでは，回数の多い家主である譲平と使用人筆頭である仲三

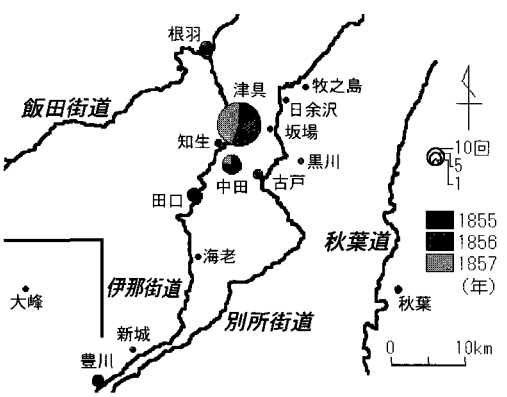

図６　仲三郎の行動領域

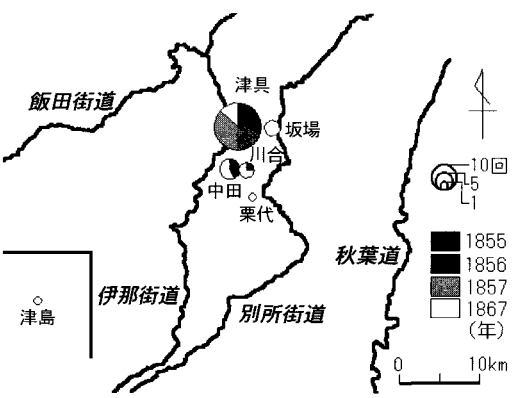

図７　嶋助の行動領域

郎を取り上げた(表2)。すると，譲平は年間を通じてその行動がみられるのに対し，仲三郎は夏場の行動がきわめて少なく，春と冬に突出する傾向にあった。仲三郎は使用人という身分で夏場は農作業に従事せざるを得なかったのであろう。とはいえ，必ずしもその生活すべてを拘束されていたわけではなく，「弓を引きに行く」[42] と何度も記載されていることからも，それなりに余暇を楽しんでいたことがわかる。

以上，山崎家の家族構成員別にその行動領域を分析した結果，属性に応じて行動領域が大きく異なっていることが明らかになった。

最後に，簡潔に述べると，第1に行動領域は世帯主であり医者の譲平が最も広く，次に仲三郎，正作と続いた。一方，女性の行動領域は狭く村内で完結することが多かった。第2に，成長に応じて行動領域が拡大していくことも示された。

表2　譲平，仲三郎の月別行動回数

譲平	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1855年	10	2	8	5	5	3	6	2	1	7	9	7
1856年	4	4	6	8	1	0	0	1	2	1	6	7
1857年	5	7	8	6	3	6	7	3	1	6	5	6
1867年	4	4	9	6	6	6	6	5	11	5	6	9
仲三郎	**1月**	**2月**	**3月**	**4月**	**5月**	**6月**	**7月**	**8月**	**9月**	**10月**	**11月**	**12月**
1855年	7	1	7	3	6	2	0	3	3	4	2	2
1856年	2	2	8	3	4	1	1	0	7	2	3	10
1857年	5	1	1	4	0	6	1	0	4	3	3	3

・単位は回数で表示した　　(『日知録』より作成)

注) これらの日付は現代暦に直してある。したがって，1855年1月，1867年1月という現代暦による日付は存在しない。そこで，1858年1月の記載を1855年1月に，1868年1月の記載を1867年1月に加えた。

V．山崎家にかかわる人物の行動領域

(1)　山崎家への出入り者

図8は『日知録』をもとに安政年間ならびに慶應3年の山崎家を起終点とした，流出・流入者の総計を地図化したものである[43]。

出入り者のおよそ8割は山崎家から約20km

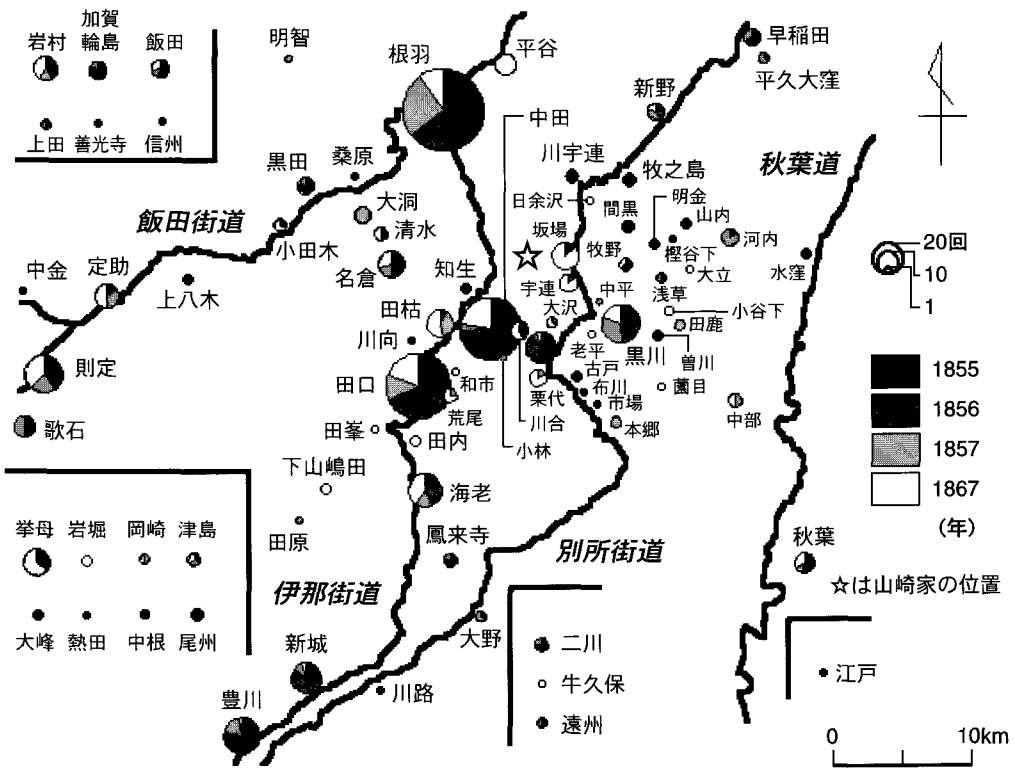

図8　山崎家への出入り者

圏内に収まり，それ以外では物資の集散地としての主要街道沿いの集落との関係が強い。例えば，伊那街道沿いの新城，海老，平谷，別所街道沿いの坂場，新野，飯田街道沿いの挙母，足助，根羽などである。ところで，数は少ないとはいえ，東は江戸，西は大峰，南は二川，北は輪島との出入りがあり，一見封鎖性の強そうな山間へき地の一農家（医者）といえども，その関係圏は想像以上に広域であったことに驚かされる。江戸の例を挙げれば「鎌助江戸土産持参被下（安政２年３月24日）」とあり，大峰については「今朝仲三郎大峰山参詣出立（安政２年７月10日）」とある。

次に，時系列的に行動領域を追うと，飯田街道の足助，伊那街道の海老，平谷，別所街道の坂場，宇連などというように，街道沿いの中心地的要素を持つ村落との結び付きが強くなっていることがわかる。この理由は日記の登場人物が成長してその交友関係が広くなることが第１に考えられる。

(2) 行動目的別分類

『日知録』をはじめとする諸々の史料をもとに，山崎家にかかわる行動目的を以下の７パターンに分類した。

① 農作業

『日知録』では農作業の記載が最も多いが，それとともに地名が書いてあることは少なく，自宅周辺で農作業が行われたことを推定させる。例えば，安政３年７月３日の記載は「三日晴天，仲三郎草刈，順蔵畑耕作，おまついも畑半夏半菜其外いろいろの草取り，市兵衛草取り，雷雨大降り，ねぶか蒔」とある。仲三郎以外の順蔵，おまつ，市兵衛は山崎家構成員ではない短期間の日雇い，あるいは季節労働者である。山崎家の農業および林業は主としてこのような労働力によって営まれていた。世帯主の譲平，妻のうめ，母のいく，息子の正作が携わることは少なく，使用人の仲三郎，嶋助が多出し，かつ記載の筆頭に出てくることから彼らが中心となって農作業は行われていた。

② 山稼ぎ

山崎家では生活していく上で，薪や草などの豊富な山林資源の活用は必須であった。その領域は，農作業の領域よりわずかに広い程度で，地名としては数カ所が書かれるのみであった。『日知録』では，津具村内だと思われ

表３ 「村送り一札之事」，「宗門送り一札之事」からみる出身者構成

西暦	年号	月	出身村	受入村	理由	性別	年齢	名前	受入先	出典
1855	安政２年	2	月	下津具	縁組	男	?	権次郎	与吉	宗
1855		3	大沢	上津具	養子	男	25	継之助	金蔵	村
1855		3	小造	津具	養子	男	24	庄作	文十	村
1856	安政３年	1	下津具溜淵	上津具	差遣	男	7	伊六	佐平	村
1856		2	清水	津具	養子	男	24	小三郎	東重	村
1856		3	溝淵	上津具	縁組	女	41	きう	峯太郎	村
1856		3	下津具北方	上津具	縁組	男	29	吉次郎	甚左衛門	村
1856		3	古戸	下津具	縁組	男		文平	丈助	宗
1857	安政４年	1	御園	下津具	養子	男	3	竹次郎	亀右衛門	宗
1857		2	坂場	上津具	差遣	男	38	徳兵衛	兼松	村
1857		3	溝淵	上津具	差遣	男	32	信平	常助	村･宗
1857		3	上津具	宝飯雨谷	縁組	女	30	けさ	久米蔵	宗
1858	安政５年	2	下津具北方	上津具	縁組	女	32	たき	縁五郎	村
1858		3	大沢	上津具	縁組	女	24	との	初平	村
1858		3	粟世	上津具	差遣	男	16	里松	熊吉	村
1858		3	市之瀬	上津具	縁組	女	18	おきよ	房治郎	村
1858		3	上津具	下津具	離縁(病死)	女	25	みや	千代吉	村
1858		3	乗本	下津具	縁組	女	?	みや	中蔵	宗
1859	安政６年	1	下津具南方	上津具	養子	男	21	八太郎	弥市	村
1859		1	下津具南方	上津具	縁組	女	23	ちか	佐十	村
1859		2	新野	下津具	差遣	女	30	かづ	仁左衛門	村
1859		2	坂場	上津具	差遣	女	21	志を	倉三郎	村･宗
1859		2	清水	上津具	養子	男	30	要助	小左衛門	村
1859		2	下津具南方	上津具	縁組	男	25	若平	ちへ	村
1859		2	大坪	下津具	縁組	女	22	こと	熊治郎	宗
1859		2	川宇連	上津具	縁組	女	23	はな	源六	宗
1859		3	坂場	上津具	養子	男	33	勝弥	? 蔵	村
1859		3	田枯	上津具	養子	男	20	兼五郎	秋五郎	村
1859		12	上津具	下津具	離縁(不熟)	男		寿三郎	半兵衛	村
1860	安政７年	2	中久名	上津具	縁組	女	20	てい	久米三郎	村･宗
1860		2	下津具北方	上津具	縁組	女	17	たか	藤五郎	村
1860		2	布川	下津具	縁組	女	23	みち	作右衛門	村･宗
1860		2	古戸	下津具	相続人	男	28	久六	覚弥	村
1860		3	宗方町	下津具	差遣	女	12	さつ	重作	村
1860		3	下津具溜淵	上津具	縁組	男	25	丈五郎	芳蔵	村
1860		3	古戸	上津具	縁組	女	22	(綱五郎娘)	久弥	村
1860		3	大沢	上津具	養子	男	36	惣助	佐五衛門	宗
1861	万延２年	1	田枯	上津具	転居	男･女		藤太郎･つぎ	源吉	村
1862	文久２年	2	荒嶋	上津具	縁組	女	21	里く	安太郎	村
1863	文久３年	1	大平	上津具	差遣	男	9	友太郎	五平	村･宗
1863		2	生田	津具	縁組	女	27	はつ	小三郎	村
1863		2	粟世	上津具	縁組	女	23	るい	庄九郎	村
1863		2	新野	下津具	縁組	女	35	きやう	太蔵	村
1863		3	下津具北方	上津具	養子	男	6	喜太郎	弥太郎	村
1863		3	下津具北方	上津具	養子	男	35	喜代松	喜代蔵	村
1863		3	中久名	上津具	縁組	女	19	みわ	与右衛門	村
1864	文久４年	1	?	上津具	縁組	女	27	かね	筒右衛門	村
1864		3	下津具南方	下津具北方	縁組	女	19	たき	信吉	村
1865	元治２年	2	下津具北方	上津具	養子	男	28	藤助	伝十	村
1865		2	根羽	上津具	差遣	女	22	りさ	由右衛門	村
1865		2	御園	下津具	縁組	女	20	つま	紋吉	村
1866	慶應２年	6	谷間	下津具	養子	男	?	米蔵	源右衛門	宗
1867	慶應３年	3	粟世	上津具	養子	男	3	藤吉	兼三郎	宗

(1855-67年間分「村送り一札之事」，「宗門送り一札之事」より作成)
注） 出典の「村」は「村送り一札之事」，「宗」は「宗門送り一札之事」

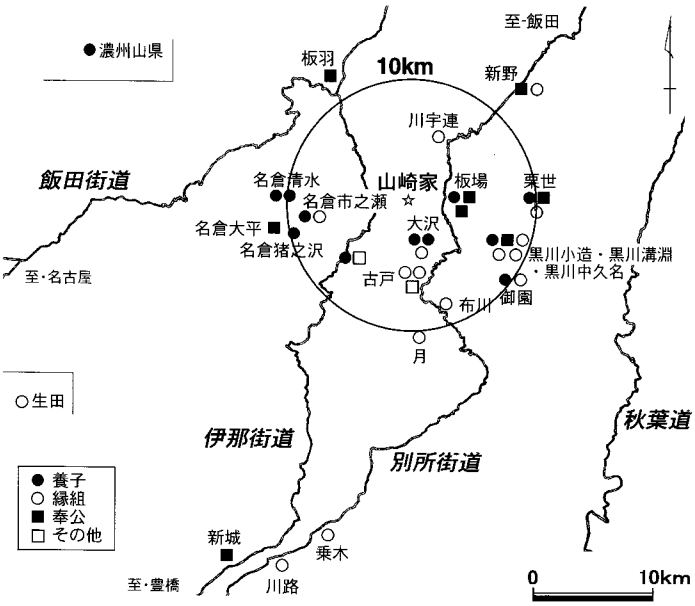

図9　養子縁組圏

をもとに明らかにし，日記分析を補強しておきたい。

まず，表3は安政2年から慶應3年にかけて現段階で津具村に残存するすべての「村送り一札之事」，「宗門送り一札之事」を西暦，年号，月（ここでは史料に沿った月日），出身村，受入村，理由，性別，年齢，名前（行動主体），受入先人名を整理したものである。その移動形態を空間的に把握するため，図示したものが図9である。

まず，移動が1例を除き1-3月に集中していることに注目したい。これは，農閑期に，養子縁組などの社会生活的行事を集中的に行ったといえる。

養子・縁組ともその範囲は大枠として『日知録』で展開される行動領域の範囲内に含まれることが明らかになった。これは，山崎家という上層農民の行動領域が養子縁組圏の限界に深く関与していたといえる。霧生も「通婚圏が，日常の生活交渉空間の一指標になることが改めて確認できよう」と論じており[45]，霧生の研究を裏付ける結果となった。霧生の対象地域である江戸近郊の八王子，かたや奥三河の津具，という非常に条件の異なる対象地域でありながらも共通の特性を持つといえる。また，基本的に通婚圏は半径10km圏の同心円状に，そしてそこから街道沿いへ伸びるように広がりをみせた。名倉と津具の間には笹暮峠（約950m），そして根羽と津具の間には折元峠（約900m）があるが，それらは通婚に関しての制約とはならなかった[46]。

る薪山，干草山，軒山のほかに，山を借りるという形で隣接する村落に位置する中田山へ出かける記載をみることができた。例えば，安政3年8月22日の記載に「廿二日晴天彼岸入り中田山干草刈初日順蔵仲三郎おさと嶋助長吉お了梅吉権太郎今朝松〆九人」とある。

③　姻戚との交流

根羽は譲平の妻であるうめの実家があり，同様に田口は譲平の母親いくの出自先である。そのほか，中部は元厚，歌石は寛仲の妻つさの出身地である。安政年間に比べて慶應3年は平谷との関係が密接になっているが，これは安政4年から慶應3年の間に正作が妻こふを平谷よりもらっていることに起因すると考えられる[44]。

次に，村内での動きをみると，上津具との接点が大きい。もちろん，上津具が下津具より大きな街を形成していたことも理由の1つであるだろうが，そこに譲平の兄であり，同じく医業を生業とする元厚の家があったことが大きい。

ここで，姻戚先との交流を公式の書類である「村送り一札之事」，「宗門送り一札之事」

④　購買行動

山崎家ではまた，医者として，そして一村民として，様々な物資を幅広い地域から取り寄せて生活に用いていた。生活にかかわる物

資の動きを表したものが図10，図11である。前者は津具村外からの，後者は津具村内での，物資の動きを表した図である。

図10によると，油・炭などの日常生活用品は主に隣村の根羽から，それに次いで足助，新城，田口などから取り寄せていた。紙は飯田，足助，根羽から仕入れていた。特産物として早稲田の大豆，二川の魚，尾州の杉苗・桐苗，上田の種物，輪島の椀などの記載がみられる。しかし，安政年間に継続してみられた早稲田の大豆，二川の魚は慶應3年になると姿を消し，代わって坂場がそれらの物品の仕入先として台頭してきている。この変化は，『豊根村誌』[47]にある「この道（坂場ルート）は近世末期に復活したようである」という説の裏付けとなろう。安政から慶應にかけて坂場が別所街道の中でも重きをなすようになり，物資の一中継地点として勢力を伸ばしてきたことの表れである。

尾州の杉苗・桐苗は，尾張の行商人・園右衛門からもたらされたもので，その記載を通じて，近世後期の行商人の一行動とその優れた商業的才覚とを見いだすことができる。園右衛門はまず求めに合わせて苗を植え付けても，すぐさまその対価としての代金を受け取ることはしない。後日，訪れて着実に根付いたものだけの代金を受け取っている。このようにして，行商人としての信頼性を高め，三河山間部にまでその勢力を伸ばしていったのであろう。また，輪島の椀に関して慶應3年にはその記載をみることはできなかったが，「和嶋直作使新左衛門来ル（安政3年12月5日）」をはじめとして安政年間では8回もの来訪があった。輪島－奥三河という物理的距離をものともせず，行商に訪れる輪島商人の姿をかい間見ることができる。

次に，図11より村内の物資の流れを追っていく。山崎家は津具村内25集落それぞれとの関係があるが，中でも上津具の影響が大きい。上津具には薬のほかに油やろうそくなどの日常生活用品を求めている。山崎家のある下津具内に限ると，その記載は上津具に比べると少なくなるが，例えば，小麦粉にするために麦を持って行く「柿平へ小麦挽に遣ス（安政3年8月8日）」。頼んでいた洗濯物を持ってきた「見出おるい洗濯物持来り弐百文会相払（安政4年10月12日）」等々，きわめて生活に密接した行動をみせている。

また，ここで注目すべきは山崎家にかかわらず，買い物を村内のいずれかに頼むことが日常的に描かれていることである。例えば，山崎家の一員が近隣集落の家に赴き，そこで買い物を何某に頼み，何某が津具村外で買ってきたものをまた山崎家の一員が何某の家に

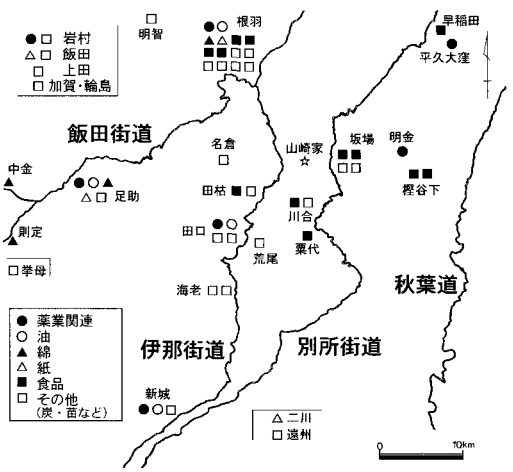

図10　物資流通図

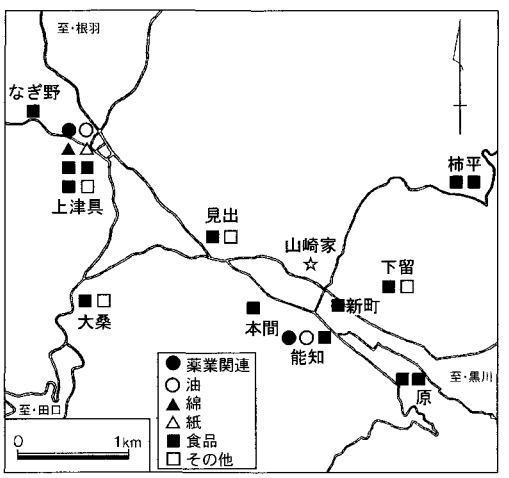

図11　山崎家の村内の購買圏

まで取りに行くという形である。例えば，安政2年4月9日の記載には「仲三郎大桑へ新城荷取りニ行来ル」，慶應3年8月1日には「権太新城行灯油頼ム金壱分遣ス」とあり，馬稼ぎが盛んであった津具村特有の流通の形態がうかがわれ，少なくとも三河山間部の街道沿いの主要村落においては一般的な買い物の形態であったと思われる。

⑤　宗教的行動

江戸時代は，現在よりはるかに宗教が日常生活に色濃く反映されていた。『日知録』にも宗教的記載が多数みられる。村内では位置は同定できなかったが，薬師堂，念仏堂，寺などが書かれている。村外では豊川，秋葉，鳳来寺，津島，熱田，善光寺が登場する。この中では比較的近距離である豊川，秋葉，鳳来寺への訪問が多かった。

また，図8によれば，豊川，秋葉，鳳来寺参詣それぞれの絶対的な訪問回数は多いとはいえないものの，これは各々の訪問がつながることが多いからであって，山崎家から豊川や秋葉に行く場合は鳳来寺経由ということが少なからずあった。例えば，安政2年10月12日の日記では，「仲三郎鳳来寺ヨリ豊川へ行」とあり，慶應3年2月には正作が豊川回りで秋葉参詣して帰宅している。このように，参詣では単独の目的地を持つばかりでなく，寺社巡りという一種の行楽的な要素を含んだ行動がなされていたようである。

⑥　役務行動

江戸時代，山間部では山論がつきものであった。津具村も例にたがわず，周辺の村々との山論がしばしば起こった。その中で，村民が役所に赴いたり「学平新之丞挙母行坂バと山論に附山五甚五郎喜六三人挙母行（慶應3年8月21日）」，あるいは役人が実態を検分しにやってきた「上津具立會山境見分譲平山境見分に行く（慶應3年8月12日）」。これらを例とするような起終点としての役所に挙母，赤坂などを確認することができた。

⑦　診療行動および薬の購入先

譲平の特徴として，忘れてはならないのが“医者”という視点であり，彼が，当時としては斬新な種痘法を行ったことである。天然痘は，種痘法が確立されるまで最も流行した病の1つで全国的にもその予防には苦心され[48]，奥三河で種痘を行う譲平を周辺の住民たちは頼みにしていたに違いない。

医療に用いる薬，あるいは医療器具[49]は主に，岩村の「薬甚」[50]，新城の「大卜」[51]という屋号の薬屋から取り寄せた。そのほか，足助，根羽，明金[52]，平久，田口[53]，上津具より薬が届いている。以上の薬を携えて診療を行ったのである。

『日知録』中，回数は必ずしも多いとはいえないが，ところどころに医業に関連する記載が見受けられる。それを抽出し，さらに薬の出先を表したものが図12である。これによると往来が激しいのが同村内の隣接地区であり，同業者の兄がいる上津具である。そして，岩村があとに続く。ただ，岩村，新城の2城下町は薬業的な事柄に関する行動のみで医療的な要因によるものではなかった。

また『日知録』中の医療的記載をみていくと，診察の形式はおおよそ3パターンに分類することができた。第1には直接的に病人が受診に来る場合，第2には医者本人が直接病人のもとに赴くという場合，そして第3には病人が存在する土地から，病人以外のものが

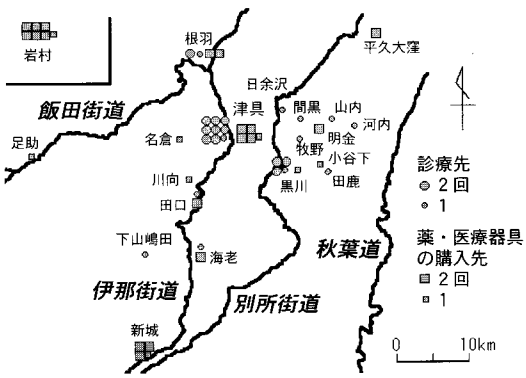

図12　診療・薬購買圏

使いとして来訪し，その後，医者が病人のもとを訪れるという場合である。さらに，この3分類はそれぞれが次のように特徴づけられた。まず，第1の形式は，主に種痘に関するもので，第2の形式は種痘，一般的な疾病とが半々，最後に第3の形式はすべてが疾病による行動であった。

その他，譲平が嶋助に鍼を打つ記述も数回あり，眼科治療，あるいは整体治療も行っていた。このように譲平は幅広く診療をしていたのである。なお，按摩に関しては自ら手を下すことはないまでも，その重要性は認め，隣村の名倉から按摩師を呼び寄せていた。

また，診療の行動領域は山崎家を中心として，きれいな同心円を描くというわけでもなく，どちらかといえば，東側の豊根村方面に偏る傾向があると思われた。それは，津具村の西側に位置する名倉には民衆にとっての有力な医者である後藤氏がいたことが大きな要因と考えられる[54]。

Ⅵ．おわりに

本研究では近世末期奥三河津具村の山崎家の日記『日知録』をもとに，山崎家に関連する人々の行動領域を分析した。

第1に，山崎家の構成員別の行動領域を分析したところ，属性，年齢によってその行動領域は大きく変わるという特性を持つことが明らかになった。

第2に，生活を営む上でさまざまな要因をもとに発生する山崎家を中心とした奥三河山間地域における行動の特徴の一端を明らかにすることができた。

最後に，医師の日記という史料的特性を生かし，譲平の診療地域が津具村を中心として東側に偏っており，診療の形式も3つに分かれていたことが明らかになった。

何よりも全国各地に数多く埋もれながら，必ずしも利用が芳しくなかった日記という史料が，日常生活の復原という意味で高度な文化的価値をもつことを示せたことは，今後の近世・近代研究を進める意味でも有意義であったと考える[55]。

以下，今後の課題として政治的背景，慣習的側面を考察するとともに，同種の史料を分析してより一層，近世・近代の民衆の社会生活を復原していきたい。

（名古屋大学大学院・院生）

〔付記〕

本稿は2000年度名古屋大学文学部卒業論文の一部を修正・加筆したものである。本研究にあたって，史料の利用と聞き取り調査を快諾していただいた津具村在住の山崎旦・はま夫妻，史料の探索に貴重な時間を割いていただき，津具村とのパイプをつくっていただいた津具村誌編さん委員の三浦茂美先生，村松一寿重先生，教育委員会の諸先生方には大変お世話になりました。また英文要旨は佐藤孝一氏（NTT西日本）に校閲いただきました。なお，本論文をまとめるにあたってお世話になった名古屋大学大学院の諸先生・院生諸氏にも合わせて心よりお礼申し上げます。本稿の骨子は2000年5月の歴史地理学会島原大会で発表し，貴重なご助言をいただきました。また作図においては簡易地理情報システムソフト「MANDARA」（谷謙二氏作製）を利用させていただいた。

〔注〕

1) 中西僚太郎「明治末期～昭和初期における自作地主の農業経営と労働力構成－茨城県結城郡八千代町・中島家を事例として－」，人文地理42-4，1990，19～43頁。
2) 中西僚太郎「明治末期～昭和初期の茨城県西部における農村生活の構造－労働の季節的リズムと年中行事・祝祭日・休日－」，歴史地理学180，1996，21～40頁。
3) 霧生　学「幕末期の村方よりみた生活交渉空間の研究－武蔵国多摩郡柴崎村の名主日記分析を中心として－」，筑波大学第一学群人文学類歴史地理学卒業論文，1983。
4) 溝口常俊「山梨県一農民の記録『源吉日記明治20年』分析－近代地域誌論序説－」，富

山大学教養部紀要25-1，1992，91～136頁。

5) 水本邦彦「近世の農民生活」(日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座7　生活Ⅱ近世』，雄山閣，1990)，3～26頁。

6) 田中雅孝「明治期一養蚕農民の村落生活－下伊那郡喬木村宇佐美家の事例－」，信濃49-8，1997，21～39頁。

7) 成松佐恵子『庄屋日記にみる江戸の世相と暮らし』，ミネルヴァ書房，2000。

8) 川口　洋「通婚圏からみた江戸時代後期の「大坂地域」(歴史地理学会編『都市・村落関係の歴史地理－歴史地理学紀要26－』，古今書院，1984)，88～108頁。

9) 溝口常俊「甲州における近世の通婚圏」，歴史地理学会会報95，1978，1～11頁。

10) 溝口常俊「近世甲斐国おける奉公人の移動に関する研究」，人文地理33-6，1981，1～24頁。

11) 福田アジオ『可能性としてのムラ社会』青弓社，1990，12頁。

12) 中西僚太郎「近代日本村落の歴史地理学的研究の課題と方法」，鹿児島女子短期大学紀要30，1995，155～165頁。中西のいう「一般化」は多数を占める一般農民を指すのだが，いわゆる上層農民以外の農民での史料を探し出すことは難しい。しかしながら，上層農民を出自とした史料でも，大まかな村落生活を把握することは可能であると考える。

13) 成松佐恵子「村の経済・庄屋家族の経済－濃州西条村の場合」，国際日本文化研究センター共同研究会報告要旨，1999，1～6頁。

14) 柳田国男『柳田国男全集　第8巻』，筑摩書房，1998，210頁（初出；『郷土生活の研究法』，刀江書院，1935)。

15) ①山崎譲平『日知録』，安政2，3年（1855，1856)，山崎家蔵。②山崎譲平『日知録』，安政4年（1857)・慶應3年（1867)，津具村教育委員会蔵。

16) 稲田清一「清末江南における一郷居地主の生活空間－その範囲と空間についての試論－」，史学雑誌99-2，1990，39～59，150～151頁。

17) ①安藤慶一郎・矢守一彦『国境いの村』，學生社，1972，137～165頁。②安藤慶一郎「村落生活」(津具村『津具村誌』津具村，2000)，116～130頁。

18) 田崎哲朗『在村の蘭学』，名著出版，1985，151～170頁。

19) 村松信三郎『津具村の古文書　Ⅵ（日知録－安政三年)』，津具村教育委員会，1986。

20) 田崎哲朗・湯浅大司「日知録」(佐藤常雄・徳永光俊ほか『日本農書全集42農事日誌Ⅰ』農山漁村文化協会，1994)，365～465頁。

21) 前掲17）参照。

22) 『嘉永三年亥年禅宗宗門人別五人組人別改帳』，嘉永3年（1850)，津具村教育委員会蔵。

23) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第13巻』，吉川弘文館，1992，667頁。

24) ここで用いた『村送り一札之事』，『宗門送り一札之事』は津具村村誌編さん室に残存する複写したものを用いた。なお，原史料の所有者は津具村，夏目家（津具村)，鬼頭勝之氏（名古屋市）と分かれている。

25) 荒井良雄・岡本耕平・神谷浩夫・川口太郎『都市の空間と時間』，古今書院，1996，16～31頁，では「生活活動空間」の定義を「人々の日常生活の営みである諸活動がなされる空間的範囲」であるとしている。

26) 愛知県教育委員会編『北設楽民俗調査報告2』，愛知県教育委員会，1971，6頁。

27) 宮本常一・宮田　登編『早川孝太郎全集第7集』，未来社，1973，9～157頁（初出；『アチックミューゼアム彙報』，アチックミューゼアム，1936)。

28) 有薗正一郎「奥三河における近代初頭の里山の景観」愛知大学綜合郷土文化研究所紀要45，2000，1～16頁。

29) 山崎夫妻からの聞き取り調査による。

30) 元厚の家は『日知録』中に「亀屋」の屋号でたびたび登場する。また，水窪町史編さん委員会『水窪町史　上』，水窪町，1983，771～772頁，にもおそらく元厚の祖先であろうと推測される記載がある。それによると，元厚の実家である三輪家は享保8年(1723)に浦川（現，静岡県佐久間町浦川）より水窪へ移り住み，開業したとみられる。

31) 安政2年の『日知録』には，すでに寛仲が隠

居して移り住んだとされる「清寿館」の記載が見受けられる。

32) 正作は幼名でのちに信一郎と改名した。

33) 江戸で初めての種痘所は，安政5年（1858）に「お玉ヶ池」に設置されたものが最初とされている。また，圭介文書研究会『伊藤圭介日記（第6集）』，名古屋市東山植物園，1999，127頁，によると尾張藩では嘉永5年（1852）に種痘所が開かれたという。

34) 前掲19)参照。また津具村『津具村誌』，津具村，2000，246頁，によると明治9年（1876）の下津具村における一戸あたり平均耕地面積は水田3.7反，畑3.3反であった。これより山崎家が上層であることがわかる。

35) 「トリップ数」，「サイクル数」についての定義は，前掲25)，44～45頁，にある以下のものを用いる。すなわち前者は「ある地点から別の地点への移動であるトリップの数」を指し，後者は「自宅を起終点とする一連のトリップの連鎖の数」を呼ぶ。

36) 『日知録』によると，一人は安政元年（1854）10月24日に没しており，もう一人は安政4年（1857）3月11日に没している。

37) 例えば『日知録』慶応3年5月28日の記載には，「正作力蔵診療ニ行」とある。

38) 津具村『津具村誌資料編Ⅱ』，津具村，1998，468頁，に所収する「明治4年日誌」1月28日の記載には「二十八日正作文吾両人津島ヨリ挙母ヘ発足致ス挙母藩御用の事神社書上百姓代役替願イ仲三郎一件」とあり，仲三郎に関する記載を見つけることができた。

39) 豊根村『豊根村誌』，豊根村，1989，461～477頁，によると，ここでいう別所街道とは本来，明治初期からの別所街道のことをいう。つまり，旧来の別所街道は新野から三沢，御園を経て本郷に至る道であったが（本研究では「三沢ルート」と名付けた），しかし，明治初期に難所が多いことからこのルートよりも坂宇場川沿いのルートが主力となった（同「坂場ルート」）。厳密にいえば本研究にそぐう別所街道は三沢ルートを採択すべきであるが，時系列的把握の上では坂場ルートにて説明を加える方が理解しやすいと考え，坂場ルートを別所街道とした。

40) 『日知録』によると「嶋助大トヨリ来リ荷物ヲ亀屋ヘ持行く（安政2年11月8日）」というように安政2年時は単独で雑事を行うことが多かったが，安政4年に入ると「仲三郎嶋助干草ツケ（安政4年2月18日）」をはじめとして，仲三郎とともに農作業に従事することが増加している。

41) 現代暦に変換するにあたり，国際日本文化研究センターで用いられている変換ソフト（速水融氏作成）を利用した。

42) 例えば，『日知録』安政4年6月10日には「甚助義ハ午時ヨリ弓仲三郎同断」とある。

43) この総計は山崎家の構成員，ならびに山崎家以外の人物すべてを含む。場所が特定できないものについては除外した。

44) 『日知録』慶應3年4月14日の記述に「嫁孝出産八ツ時女子出産也」とある。

45) 前掲3）参照。

46) 前掲10）で，溝口は「通婚圏域を変化せしめる要因として，交通路と共に，大河川とか尾根，峠等の地形的要因がかなり働いていた」という。本研究ではこうした地形的制約はみられなかった。この結果が山間地を理由とするのかは今後検討を要するところである。

47) 前掲39）参照。

48) 近世・近代の医療に関する研究として例えば，①川口　洋「武蔵国多摩郡中藤村周辺における疱瘡による子供の死－陰陽師指田摂津正藤詮の日記を史料として－」，ＥＡＰ日文研発表会報告要旨，1996，1～13頁，②小林　茂「近世の南西諸島における天然痘の流行パターンと人痘法の施行」，歴史地理学197，2000，47～63頁，などがある。

49) 例えば『日知録』安政4年4月25日に「新曲頭管」の記載がある。おそらく医療に用いた器具のことであろう。

50) 「薬甚」とは薬屋甚吉の略号のようである。というのは，岩村町史刊行委員会『岩村町史』，岐阜県岩村町役場，1982，243頁，にある町方家並帳によると，新町多助組の中に「甚吉」とある。時代的にも10数年しか変わらず，薬甚であろう。

51) 「大ト」とは現在でも新城で営業を続けてい

る「三原屋」である。前掲20）によると屋号の由来は秋葉寺に深く帰依していたため，秋葉寺の山号「大登山」の使用を許可されていたという理由に基づくものらしい。

52）明金からは「猪肝」を取り寄せている。譲平は植物抽出の薬だけでなく動物を原料とする薬をも処方していたことがわかる。

53）聞き取り調査によると，田口からの薬は顕吉によるものだが，ここでは「安神散」という独特の薬を製造していた。現在は「安神散」という屋号だけが残り，営業はされているが製造はしていない。そしてこの薬は山崎家から伝えられたというもので，正作も年を経てしばしば訪れていたという。

54）大島信雄「紙面に見る後藤病院開院のころ」，http://www02.so-net.ne.jp/~oshimamd/i87.html，2000，によると，現在，豊川市で医業を営み，豊川市医師会長を務めている後藤有三氏の，5代前にあたる先祖は江戸末期に名倉で開業していたらしく，「桃源堂」の名で慕われていたという。なお，後藤氏は津具村の郷土史家であり，柳田国男や宮本常一とも親交のあった故夏目一平氏の遠縁にあたる。

55）木村礎・林英夫『地方史研究の新方法』，八木書店，2000，144～145頁，で山口徹は「日記や覚帳は農民や漁民の私的生活や家の文化を示す一級の史料」ともいう。

People behaviors in a mountain village, Tsugu, 1855-1867.

Yusuke MURATA

The purpose of this paper is to analyze where and why people moved and acted during the end of the Tokugawa era, 1855-1867. Tsugu village is located in the northeast part of Aichi prefecture. The average altitude of this area is about 680m, and Ina-Kaido, which is the main road between Ida and Yoshida (Toyohashi), passed through the village. In order to delineate their real behaviors, I analyzed the diary 'Nicchiroku', written by Johei YAMASAKI who was a doctor and an upper class farmer in Tsugu village. He continuously noted down on the farming, medical treatments, annual events, religious activities, official works as a head of village and so forth. Main characters were Johei himself, his wife, his mother, his son and two servants. To identify their ages and relationship, I supplementary used the 'Shumon-aratame-cho', 'Shumon-okuri-issatsu', and 'Mura-okuri-issatsu', which were kinds of the family register and certifications of the movement.

The summaries of this study are as follows: As a result of analyzing trip area of the members of Yamasaki family, Johei had the widest trip area. Second, in case of trips of Ume (Johei's wife) and Iku (Johei's mother), we understood that women rarely went out of the villages, if they went outside, they mainly went to their home villages. Third, compared Shosaku (Johei's son) with Shimasuke and Chuzaburo (his servants), although their ages were almost the same, their trip areas were different. And their trip areas gradually widened with their growing. From these facts, we can say that his servant's movement area was closely connected with Yamasaki family's life. The last, the number of Johei trips were seen constantly through a year. On the other hand, Chuzaburo, his movement stood out spring and winter.

Next, I classified trip patterns into seven groups. Here, I will explain four patterns. The results of the study are as follows:

1) Particularly, foster children's area and marriage area were included within the movement zone of 'Nicchiroku'. So adoption area was deeply connected with daily life area. Moreover this case of study, I could not find the restriction of geographical features about marriage area.
2) In this diary, there are a lot of records about shopping. Many people tended to ask the one person who went to other villages to buy goods to buy some. At least, it was the general shopping style at the Oku-Mikawa mountain villages located on the main street. The goods of daily life were mainly got from Neba, and in addition come from Asuke, Shinshiro, Taguchi, and Ida. Consequently this study is backed up by 'Toyone-sonshi' as to Bessyo-Kaido.
3) We could understand medical styles at a mountain area in early modern ages from 'Nicchiroku'. Johei had three medical styles. First, patients directly came from their own village to consult a doctor. This type was mainly vaccination. Second, Johei went to patients' house in order to treat patients. This type was adopted in cased of vaccination and generally treatments. Third, a man who lived near patients went to Johei's home and asked if Johei agreed with treatment. Then, if Johei accepted the request, he went to patients' home. This type was adopted in the case of general treatments.
4) Worship at shrine and temple was sometimes linked each other. So the visiting shrine or temple tended to mean not only worship factor but also excursion and journey factors.

But these movement patterns were complicated organically, so these were not always classified into a certain pattern.

In conclusion, we pointed out that the diary had high value from cultural point of view. In Japan, there were many diaries of Tokugawa era. So if we use these sleeping historical materials, we can make clear lively daily life of people.